校長室だより～燦燦～ №５８３

# 手紙

2022.7.11

６月の福島支部中体連総合大会の折に、久しぶりにお会いした方がいた。その方から声をかけられた。振り返ると、もう９年前のことになる。娘が中学校のソフトテニス部に入った。もともと、娘を含めて何人かで、テニスコートを探しては練習していた。娘たちの先輩にあたる２・３年生にも声をかけてみた。するとたくさんきた。みんなやる気があるのである。うまくなりたいのである。

そのうち、男子もくるようになった。その中に、U君がいた。息子もソフトテニス部だったため、U君は、息子が３年生のときの１年生になる。親御さんとも自然と話すようになる。すると、U君がいろいろと悩んでいるということがわかった。あのときの私は何を思ったのか、いつものお節介ぐせが出たのか、U君に手紙を書いた。けっこう長くなった。

久しぶりにお会いした方は、U君のお母さんである。９年ぶりにお会いし、いろいろな話をした。お母さんは、その日、家に帰り、U君に私と会ったことを話したそうである。次の日も、お会いして話をした。U君に私のことを話したところ、U君は、９年前の手紙を取り出して読んでいたそうである。私も家に帰り、手紙を書いたことを思い出していたところだった。

９年前の手紙を持っているU君がすごいが、手紙には力があると思う。何よりも形として残る。相手に伝える手段としては、直接会って話す、電話で話す、メール、ライン、そして手紙である。同じ手紙でも、パソコンと手書きでは随分と味わいは変わってくる。

９年前、U君には手書きの文面を送った。それが一番いいと考えたからである。手紙だからこそ伝わることがある。時代が変わろうが、いくら世の中が便利になろうが、手紙がなくなることはない。なぜなら、手紙でなければいけないときがある。手紙が一番いい場合がある。

お母さんに話したことがある。「出会いは、時間の長さではないと思います。何年も一緒にいても心が通わないこともあります。ほんの短い間でも、心が通じ合うことがあります。そのときに何があったかだと思います。どんなことを考え、感じたかです」

U君の人生からしたら、私の存在は、ほんの一瞬であろう。だが、手紙とともに何かが残っているのも確かである。だから、常に出会いは大切にしたいと思う。それは大人でも子どもでも同じである。

U君に私ができることはないかもしれないが、手紙がある以上、もしかしたら今でもお節介はできているのかもしれない。私は筆まめな方ではない。手書きの文面をしたためることなど滅多にない。その数少ない私が書いた手書きの手紙をU君が持っていてくれると思うと、U君の将来に思いを寄せる自分がいる。

これからも思わず手紙をしたためるような出会いがあるかもしれない。また、下手な字で丁寧に書いてみようと思う。